
とある魔術の禁書目録

アナザーデイ・エンカウント

FAIVA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の禁書目録

アナザーデイ・エンカウント

【Nコード】

N1522V

【作者名】

FAIVA

【あらすじ】

『神の右席』の右方、フィアンマの策略をロシアにて崩し、ようやく学園都市に帰ってきた上条達。しかし、その帰国から数日経ったある日、買い物帰りの上条は、持ち前の不幸で面倒に巻き込まれ、更には新しくやってきた新参の超能力者に目を付けられて。

とある魔術の禁書目録

アナザーデイ・エンカウント

とある超能力者と無能力者が交錯する時、物語は紡まれ、世界は

変わり始める。

第一章（前書き）

pixivからの転載です（本編完結記念）。

個人的には縦書きPDF推奨ですw

今作は「とある魔術の禁書目録」の二次創作ですので、二次嫌いな方などはお気を付けて下さい。

また、一応形式的には連載ですが、こちらでの連載はまだ未検討なので、もしかしたらですがこっちではこれで終わるかも。

一応、続編はありますが、少々迷いどころがあります（続編は原作ネタバレありなので見に行く場合は注意をば）。

その辺は、ご了承下さいませ。

あと、感想、意見・間違い指摘等は歓迎（ただ、意味の無い誹謗中傷や言いがかりは勘弁して下さい）

と、言うわけで。それでは皆さん、よろしくお願ひしますw

第一章

「プロローグ」

それは、唐突にやってきた。

一人で公園の砂場で遊ぶ少女。その周囲に人がいる気配はない。時間的には親子連れの家族がいてもおかしくはないが、このときは偶然誰も居なかった。

当然、今の彼女には一緒に遊ぶ友達は居ない。もとより、普段から他の子と積極的に遊びに行ったりしない彼女には、たとえ誰か他の子がこの場に居ても、声を掛けて一緒に遊ぶなんて選択肢は無かっただろう。彼女にそんな勇気がないからこそ、彼女は今一人でここにいるのだから。

しかし、今日ばかりはそんな「普段」とは状況が違っていた。背後から突然、誰かが砂利を踏む音が聞こえた。自分の真後ろという近い位置からの音に一瞬ビクリと身体を震わして、おそろおそろ後ろを振り向いた。そして、目の前に現れたものを見て目を見開く。

目の前にいたのは「自分」だった。

顔、髪型、服装、身長に至るまで全くの同一、鏡写しのようになりつきり同じ自分であった。

自分が目の前にいる。そんな現象は普段、鏡の前くらいでしか見ることはできない。しかし今、自分は鏡なんて存在しない公園の中で、生身で存在するもう一人の自分に出会ってしまった。

ドッペルゲンガーと呼ばれる存在がある。あくまで架空の存在とされるそれは、本人と全く同じ容姿をしており、もし出会ってしまったとその者は近いうちに死ぬと言われているオカルト現象だ。

しかし、幼い子供がそんなことを理解しているはずもない。

友達がほしい、みんなと一緒に遊びたい。そんな思いが自分に幻覚を見せたのだと、少女と同じ歳の普通の子ならば思うのかもしれない。だが、その少女は違った。もう一人の自分がいることに最初こそ驚いていたが、すぐに受け入れた。

「ねえ、キミも一緒に遊ばない？」

「うん。遊ぼう」

その後、二人で砂のお城を作り、そして壊すを繰り返す。そして夕方になって、少女はもう一人の自分を連れて一緒に家に帰ることにした。お姉ちゃんやお母さんは、この状況をどう思うだろうか。とっても驚くだろうなと思うと、不思議と笑いが込み上げてくる。

家に着くと、ただいまー、と言いながら居間へ向かう。居間では、姉がテレビを見て笑っていた。

そんな姉に向かつて、少女は自慢げに声を掛けた。

「ねえねえお姉ちゃん。ジャジャーン、どう？」

そう言って、今の今まで繋いでいた手を引つ張る、が。

「…………… あ、あれ？」

先ほどまで、居間に着くまで一緒にいたもう一人の自分がいなくなっていた。まるで、最初からそこには誰もいなかったかのように。「ん？ 何よう、何がジャーンなの？ 何か変わったことでもあった？」

「え、えつと、その…………… さっきまでもう一人、ここに居たの……………」

「誰が？」

姉がそういうと、少女はおずおずと自らを指差す。

「何よそれ」怪訝に思いながらも、姉は少女の傍に寄る。 が、近くに誰かがいる様子は無い。

「ん？ 誰もいないじゃない。からかってんの？」

「違うよ！ ほんとに居たんだもん！ 居ただけど……………」
「はいはい。要するにアレね、ドッペルゲンガーにでもあったわけ

ね。でも、気をつけなさいよう。ドッペルゲンガーって、出会うと死ぬって話があるし。ふふっ」

「む　　、むう~~~~ッ！」

姉に全然本気にしてもらえない事が分かると、少女は少し膨れたまま、母親がいるであろうキッチンに向かおうとする。この時間帯なら、今ごろ母は夕食の支度をしているころなのだが。

「あー、今日は母さん、婦人会の役員の仕事で遅れるって。っていつか、そんな馬鹿な話母さんにまでしないでよう」

「.....」

姉の言葉に少女はカチンときたようだ。しかしだからといってどうすることもできず、いじけた少女はそのまま姉に背を向け二階にある自分の部屋へと走り去ってしまう。

「って、ちよっと。何いじけ虫になってんのよう」

言い過ぎたかな。そう思った姉は妹の後を追いつ、玄関の前にある階段を上ろうとする。しかし、そこで姉は気付いた。

「.....え？」

玄関の靴を見て、違和感を感じる。母は今外出しているのは自分と妹の分しかないはず。しかし、今玄関には三足の靴が並んでいる。しかも、違和感はそれだけではない。

『妹の靴と全く同じデザインの靴』がもう一足、ある。

「.....ドッペルゲンガー」

それを見た姉は、先程自分が冗談で言ったあの単語を反芻してしまい、背筋を凍らせる。

「ま、まさか.....ね」

そんなわけがない。本当にそんなものが存在してるわけがないと軽く鼻で笑いながら呟く。だが、そう確信しているはずなのに、自分にそう言い聞かせることを姉は止められなかった。

そして、妹を追いかけるはずの足は止まってしまい、結局今日彼女が妹と話をする事はなかった。

翌日の朝、そのもう一足の靴が玄関から姿を消すまで。

「合コン（出会い）」

学園都市と呼ばれる、東京都の中央三分の一を円形に占めている都市がある。

総人口二三〇万人弱。そして、内部には多数の研究機関の他に、たくさんの学校が存在することから、その人口の八割が学生で占められている場所である。そして、内部は二十三の学区に分かれており、各学区ごとに特徴がある。

しかも、この学園都市は一大能力開発都市という裏の顔を持つ。学校で組まれている通常のカリキュラムの中に、「記憶術」や「暗記術」という項目で生徒に超能力開発を行うカリキュラムが存在しているのだ。

さらに、能力開発以外の科学技術もぶっ飛んでおり、最先端の技術を実験的に実用化・運用しているため、外よりも二〇年から三〇年分ぐらい文明が進んでいるという。そのため、警備は非常に厳重で、交通の遮断に加えて周囲が高さ五メートル・厚さ三メートルの壁で囲まれている上に、現在は街全体を二機の監視衛星が常に監視している。

ちなみに以前は三機の監視衛星によって監視されていたのだが、夏の初め頃にその一つである『樹形図の設計者』と呼ばれる超高度並列演算処理器を積んだ人工衛星「おりひめI号」が地上からの謎の狙撃によって打ち落とされたため、現在は二機のみとなっている。そして、この謎の狙撃というのが、実は夏の初めにインデックスが放った竜王の吐息ドラゴンブレスだったのだが、その当事者である上条やインデックスは、その時に記憶を無くしたり、自動書記ヨハネのペンにより目覚めたりしていたため、その事を知らない。

そんな二人は現在、第七学区のとある独身寮にて生活している。最近まで、イギリスでのクーデター後に動き出した『神の右席』の

右方、フィアンマの策略をロシアにて崩し、自動書記の外部制御靈ヨハネのペン装に囚われていたインデックスを助けたりしていた。その後、一時一件落着いた彼らは紆余曲折の末ようやく学園都市に帰ってこれたのだ。そして、その帰国から数日経ったある日のこと。

太陽が真上に来る真昼間の休日。その日、上条当麻は本日二度目の不幸に見舞われていた。

「ふ、不幸だあーッ!!!」

「なああにが不幸だあコラア！ テメエ落とし前くらいつけてけやオラア!!!」

現在、上条当麻はおっかなそうな連中相手に絶賛逃亡中である。何故こんなことになったのか。そのきっかけは、まず最初の不幸である、青髪ピアスと土御門元春の願いを聞いた事から始まった。

今日の午前に、上条当麻は昼飯の確保のため、インデックスに部屋の留守番をさせたまま近所のスーパーの特売へと急いでいた。こんな時間帯の特売は滅多にない事であったし、今回は特に違法くさい訳アリ品かと思わせる程の大セール価格であった為、お財布事情が常に厳しい上条としては、ここはどうかこの特売にこぎつけておきたかったのだ。

そんな上条の前を二人の影が通りかかる。上条のクラスメイトの青髪ピアスと土御門元春であった。

向こうも上条に気が付いたようで、こちらに向かって手を振っている。

「おお、カミヤん。そない急いでどないしたん？ もしかして、女の子とのデートに遅れそうとかいう展開ですか？ ……なあって、そんな甘い展開が我々生粋のモテナイ組にあるわけ無いわなあ。 …… って、ちょ、ガン無視はナシやでカミヤん!!!」

完全に二人を無視してそのまま突っ切ろうとしていた上条の腕に青髪ピアスがしがみつく。その隙に、土御門が上条の前に回りこんだ。

「カミヤんカミヤん。何をそんなに急いでるのかは知らんが、自分のクラスメイトの挨拶をそのままスルーってのはどうかと思うぜい？ 流石のオレ達も軽く傷つくにゃー」

と、これは土御門のいつものような軽口なのだが、対して上条はとても必死な表情で叫ぶ。

「わ、悪かった謝る！そこはちゃんと理解したから今は行かせて下さい！あとで用事があるなら聞くから！今回の戦利品が無いと今月を乗り切れないどころか空腹シスターの餌食になってしまうんですーッ！！」

「んん、戦利品？ ー事は、買い物に向かうところって事か。んじゃ、丁度良いぜよ」土御門は青髪ピアスの方を見て、「買い物終わってからも良いから、コイツの下宿してるパン屋の前へ、この後メールで指定した時間に集合してくれにゃー。合コンの人数合わせのつもりなんだが、その代わり払いはこっちで持つ。それなら、カミヤんにとっても都合ってモンだろ？」

「う、合コン！？」

土御門の会話の中に思ってもみなかったワードを聞き、上条は反射的に食いついてしまった。

上条にとつて、合コンなんてものは一生縁のない催しと言っても過言ではない。悲しいことにそう自負している。だが当然、男の子である上条にも、それへの憧れは多少なりともあるわけで。

しかし、

「あーでも、既にフラグを大量にお持ちのカミヤんには、今更合コンなんて必要ないんかもなあ。別にボクらも、無理にとは言わんよー？」

「っていうかカミヤん、間違っても女の子連れで来るんじゃないぜよ。そんな時は流石のオレ達もブチギレてカミヤんに何するかわから

んからにゃー？」

そう、今日合コンに行くという事は、今留守番中のインデックスに更に留守番してるという事。そのためには、どうにかしてインデックスをなだめすかしておかなくてはならない。そして、その為の材料と理由付けが必要となる。

(土御門たちと食べに行つてくるとでも言おうか。いや、そんなこと話したら、絶対ついて行くって言って喚くんだろなあ・・・)

はあ、と少し心労からくる疲れをため息として吐き出し、上条は決意する。

(メシでお腹いっぱいにしてついてくる気を無くさせるしかない、よな)

どうやら、今日はお財布とたくさん相談しなくてはいけないようだ。

「・・・不幸だ」

そう思った上条は、ポケットの上から財布に触れ、更なるため息をついた。

今日の特売は、普段不幸な自分には珍しく、激運と言っても良いぐらいの成果があった。この後インデックスをなだめすかす材料として使っても、余りあるくらいには。

なので正午を過ぎた今、上条は午前中とは比較にならないくらい上機嫌である。

しかし、油断してはならない。こういう時に限って、突然現れた御坂美琴に体当たりされて特売品をダメにされたり、突然キレた御坂美琴にビリビリされて金を紛失したりと、唐突の不幸が襲ってくることを請け合はずだ。

「・・・っていうか、アイツに関わるといつもろくなことがねーよな」

特にビリビリ中学生の接近には注意すべし！ と周りに不幸をもたらすものが無いか警戒しながら帰り道を進む上条。今回は品数も多いため、これらを紛失したりした日には、今後一週間は完全に飯抜きが決定してしまう。

しかしふと、このまま進むと集合場所のパン屋の前を通ることになる事に気が付いた。

「うーん。今の時間帯に通ると、土御門や青髪ピアスと遭遇しそうだな。……よし」

どうせ後に会うとしても、今の上条にとっては厄介な人物には違いない。特売品をダメにされる可能性が少しでもあるなら、絶対に避けるべきである。

「アイツらの場合、ダメにしたとしても『どうせ合コンの払いはこち持ちなんだし、それでチャラにしてくれせよ』とでも言いそうだしな」

ちなみに、この場合の払いは全て青髪ピアスであるらしい。同僚の苦学生である土御門にそんな払いは期待していなかったとはいえ、青髪ピアスに少し悪い気もする。

そんな事を考えながら、本来通るべき道を避け、いつもと違う道順で帰路についていた上条は、

角を曲がってきた如何にもヤクザです、という感じの連中とぶつかった。

「あ………」

しかも、その先頭のサングラスを掛けたオールバックの男は、その拍子に手に持っていたアイスを自分の服の上に落としてしまったようだ。

上条はすぐさま土下座モードに移行。危機感から来た反射によって既に両手と頭は地面の上である。そして、たとえ往來でヤクザがアイス片手に悦に浸っていたのを目撃しても、上条はそれに対する

感情を一切表には出さない。いや、もとよりそんな余裕もない。

「スミマセンでしたー!!」

出来としては、完璧である。しかし、時と場合によって、その心が相手にしつかり伝わるとは限らない。

「何さらすんじゃワレエー!!」

「どこに目エ付けとんじゃてめえ!」

「ほ、ホントにすみませんでしたーッ!」

ひい、と上条は後ずさる。どちらかというところ、当たって来たのは向こうの方なのだが、実害があったのは向こうだけだったため、こっちが悪いようにも感じる。

とはいえ、先程買い物で持ち前の金の大半を使ってしまったため、上条にはこの損害を弁償する金もない。苦渋の選択として、今回の戦利品を献上するとしても、相手がそんなもので許してくれる連中とも思えない。

ここはもう逃げるしか生き残る道は無いのでは? そう思った上条は、相手に囲まれるよりも早くその場から脱兎のごとく逃げ出した。っていうか、あのまま逃げなければ今頃東京湾かどこかに連れてかれてそのまま沈められてたんじゃねーかと思う。

.....そして、今に至る。

「も、もうかれこれ一時間はフルマラソンしてるぞ。いい加減諦めてくれ.....」

「て、テメエがさっさと堪忍すれば、こ、こんなに俺達が.....
・はあ、はあ」

「ぜ、ぜってえもう許さねえ.....」

今回の連中は体力と根性がしつかりしているようだ。普段追い掛けてくる人種ならもう振り切っている頃合だというのに、先程の○人中いまだ脱落者がたったの五人である。何でこんな時に限ってー!!! と絶叫したい上条ではあるが、そんなことに費やしている体力も酸素も今はない。曲がりくねった道を選び、そして川沿いの裏道を通って必死に彼らを撒こうと疾走する。先程の話を聞いた限

り、彼らはあるで全員のようなので、撒いてもさらに応援を呼ばれる心配はない。・・・多分。

と、上条の前方の横道から、脱落したと思つた5人が通せんぼするように現れた。

「うわっ！ ぜ、絶体絶命!？」

「・・・ハアハア。く、ククク・・・、こっちは既に、別働隊を動かして先回りさせてたんだ、よ。そして、・・・ハアハア、お前がこっちにくるよう、ゆ、誘導してたんだ。・・・ざまあねえな、小僧。ハア・・・」

「どおよ。カシラをただのヤクザだと思つてんじゃねえぞ。学園都市に唯一存在する極道『樂龍組』に若干一八才の若さで頭領になつた御方だぜ! その名も」

「い、いちいち説明なんてしてんじゃねえ! 布教でもしに来てんのかオメエは!？」

こいつらの頭ヘッであろうオールバックのグラサン男が、丁寧に説明しようとしていた側近らしき男を殴り飛ばす。そんな光景を見て、何となく彼らは普段からあんな感じなんだろうなとか思いながら、上条は一つ疑問を口にした。

「が、樂龍組つて?」

極道なんてものが学園都市に存在するなんて話は聞いたことが無い。ここは住人の約8割が学生である都市だ。中に入るだけでも厳しい検査が必要な上に、この上空では常に人工衛星が不審な人物ジャッジメントがい不见か見張つている。そんな組織があれば、真つ先アンチスキルに風紀委員が警備員に見つかつて制圧されていると思うが。

「ああ、そりゃあカシラがここで新しく結成した組織だ。つってもまた事務所すら構えてねえ小さな組だな」

「だから何でオメエはいちいち説明しやがるんだ!」

(・・・要するに、今はまだ小さなゴロツキの集まりみたいなものだから、風紀委員も警備員も動かないのか。・・・ていうか、全然凄くも何ともないのでは?)

またしても殴られている解説役の男を見ながら上条はそんなことを思ったが、ふと気付く。

「　　って、一八才!?　　ってことは、あんた達は未成年って事ですか!?!」

「ああそうだよ!　わりいか!?!」

「ここは学園都市だぜ?　当たり前だろうが」

「あ、でもカシラ。オレツちは大学院生なんで二十歳っすよ?」

「だからどうしたあつ!!　何だ自慢か?　自慢のつもりか?!?」
(.....あー、何だか良く分かんねーけど、猛烈に濃い人たちだな)

何だか、関西特有の漫才を見ているような気分になる上条。

ついでにそろそろ隙を衝いて逃げられる頃合かもと思い、上条は一歩後ずさるが、その瞬間に頭が手を振り上げる。すると周りの包囲が狭まった。

「おっと、逃げようつたつてそうはいかねえぜ」ニヤリと頭は口の端を歪ませ、「こう見えても俺は能力者でなあ。テメエの携帯電話から既に情報は収集済みだ。今逃げたら、俺たちはテメエのアドレスに載つてた奴ら全員のところにブッコミかけに行くことになるぜ」
「なっ!?!」

その言葉に上条は絶句する。そして、関係の無い人間までも巻き込もうとする頭のやり方に、上条は猛烈な怒りを覚えた。そして、犬歯をむき出しにして吼える。

「　　テメエツ!!」

「ハハツ、良い面構えになっただじゃねえか、気に入ったぜ」そういつて、頭は上着を脱いで側近の男に渡す。「そっいや、テメエも能力者だろ?　俺のテレパスが通じてなかったところを見ると、何かしら空間に作用するものか、他の力を遮断する事のできる能力に違いねえ。何だかんだで俺も攻撃向けの能力ではないんでなあ。具体的な能力が何かは知らねえが、ここまで力を使って迎撃して来なかった事に敬意を表して、お互いステゴロのタイマンで勝負しようじ

やねえか」

そう言って、頭の男はファイティングポーズをとる。

「俺の名前は如月樂斗。一応、極道をナメてくれた落とし前はつけさせて貰うぜ？」

如月樂斗と名乗った男は、実際にはそこまでワルでもないのだろう。向こうの発言を聞く限り、彼とぶつかった事ではなく、極道をナメられたという理由でここまでしているようだ。そして、彼らから突然背を向けて逃げ出した事が、彼らで言う「ナメる」にひっかかったのだろう。

頭である樂斗は、先程からタイムマンだの敬意だの落とし前だの、ただの喧嘩ではなく正々堂々と決着をつけようぜといった発言をする。別に、とにかく誰かをボコボコに痛めつけてやりたいとかいう訳ではないらしい。そしてファイティングポーズをとった彼の表情には、先程と違い何か真摯なものがあることに上条は気付いていた。そういったところから、何かしらのこだわりというか、信念のようなものを感じる。

つまり、向こうにもそれなりの事情があり、彼はそれを全うしようとしているだけなのだと思う。この場合、彼の信念の中に、ナメられてはいけない大切なものがあるのだろう。

「・・・・・・・・」

だからこそ、上条は相手のその提案を何も言わずに素直に受け入れた。

大切なもの、自らの信じるものを守ろうとする姿勢は、決して蔑ろにされていいものではないと思うから。

上条は無言で握り拳をつくり、樂斗と同じようにファイティングポーズをとる。

その様子に樂斗は軽く口の端を曲げると、すぐに表情を戻した。

どちらともなく摺り足で近寄り、少しずつ相手との距離が縮まる。

そして、ついに両者ともに相手を拳の射程範囲内に捉えた。
しかし、結局両者がその拳を相手にぶちかますことは無かった。

「あはは、何だか面白い展開になってるねえ、おにいさん」

不意に上条たちの上から、そんな声が降ってきたから。

「だ、誰だ!？」

樂斗が上を仰ぐ。上条もその先を目で追い、そして見た。

「いやだなあ、オジさん達には興味ないんだよね。だからオジさん達に名乗る名前もないんだよ」

上条たちの真横にある、川沿いの高いフェンスの上。そこに彼はいた。

フード付きの黒いジャンパーを被り、栗色の眼で射抜くように眼下を見下す一人の少年。

黒いフードの下で白いショートの髪が風で揺れている。そして、彼の口元は標的を見つけた獣のような笑みで裂け、

彼の眼が、上条に向いた。

「初めましてだね、上条当麻。ボクの名前はラビ 白羅ラビだ」

そういつて、その少年 ラビは降りてきた。

「ぐぐあっ!」

「か、カシラあ!」

そして、樂斗の顔を足蹴にして降りてきたラビは悠々と着地し、上条の前までやってくる。

「……ふうん。何か、噂に聞くほど強そうには見えないんだけどなあ」

「な、何だよ? その噂って」

「え? だって、あの学園都市第一位の アクセラレータ 一方通行を倒したんでしょ? 事件後、改めて学園都市が公開した情報には、『キミに倒された』という事実だけは消されてたけど、実際はキミが直接彼と戦って倒したんだよね?」

ビクリと上条は身体を震わせた。

「なっ!?! 何でその事を……?」

学園都市上層部の情報操作で、上条らが海の家に行っている間に『上条が一方通行を倒した』という事実は世間からは無くなっているはずだった。何故それが事実であるということを知っているのか。

上条の表情に出た驚愕の意味を悟ったのだろう。ラビはニヤリと口の端を歪ませる。

「お、ほら凶星じゃん? 良かった良かった。これで心置きなく

って、うわっ!?!」

背後からの殺気に気付いたラビは、とっさにその場から飛び退く。そして、ダンツと先程までラビがいた場所へ入れ替わるように人影が降り立った。

「こ、こんガキィ……。何さらしてくれとんじゃあっ!!」
フェンスを利用した飛び蹴りに失敗して上条の目の前に現れたのは、先程ラビに踏みつけられた樂斗であった。そんな彼の様子は凄惨で、頭にガラス片らしきものが刺さってドクドクと額から流血している。

「テメエのせいで、俺のサングラス（お気に入り）が砕け散ってんじゃねえか!?! この落とし前、どうつけるつもりだ、ええ!?!」
「いや、それよりまずその額の流血をどうにかした方が良いのでは?」

怒るところはそこかよ、と流血したままの樂斗に思わず突っ込みながら上条は思った。

「おう、わりいな……。あー、上条当麻だったか。オメエとの喧嘩はまた今度になりそうだ。まず目の前のナメ腐った小僧をブチ殺してからになるからな」

「いや、もうやりたくないです。はい」

上条としては、こんな危なっかしい連中と今後も関わり合いにはなりたくないのが本心だった。

「そう邪険にすんじゃねえよ。本気どうしの喧嘩ほど、楽しいもんは無いんだ　　ぜいっ！」

そう言うのが早いか、樂斗はラビに飛び掛った。しかし、ラビは素早くそれを飛び退いてかわす。

「ちょ、もう！　おじさんの相手なんて別にしたくないんだけどね！」

「ハツ、知るかよ。っーか、どうせテメエも能力者だろ？　だが例えどんな能力者であろうと、極道をナメられたまんまにするわけにはいかねえからな。わりいが能力がどんなのかも分かんねえし、ガキでも手加減できねえぜ！」　そういつて樂斗はラビに仕掛けた。

助走をつけてからの蹴り。見ただけで分かる樂斗のその蹴りの鋭さからも、当たれば少年の骨を折る威力であることは明白だ。

そんな蹴りに対して、ラビのとった行動は

「おじさんに能力を？　使わないよ、そんなの」

樂斗の蹴りを眼で追いながら、スウエーでかわしてみせた。

そして、そのままの勢いで地面に手をつき、逆立ちしながら脚と手を縮ませ、

「だって、必要あるの？」

ロケットのように樂斗の頭を蹴り飛ばした。

「うぐあっ………！」

そして吹き飛ばされた樂斗は、そのままの勢いで背後の壁に頭を打ち　　気絶した。

「か、カシラあ……！」

「てんめえクソガキ、もう詫び入れて済むと思うんじゃないぞ……！」
「生きて帰さねえ……！」

頭である樂斗を倒され、キレ掛かっているヤクザの連中のやばそうな雰囲気、流石の上条もラビのフローに入ろうする。

「いやいや待つてくださいよ皆さん。確かにコイツも悪いけど一人

相手にその人数でリンチっていうのも「あーもう面倒臭いなあ。こ
うちは急いでるんだから、さっさと掛かってきなよ」

「あ」

せつかくのフォローも空しく、話を割って余計火に油を注ぐラビ。
流石の上条も、いやもうこの子何言っちゃってんだよ馬鹿ー！！
と、頭を抱えながら心の中で絶叫する。

そして当然、

「上条だゴルア！！！！」

完全にブチギレた連中がラビへと襲い掛かる。上条ならこの時点
で戦略的かつ全速力撤退ものだが、驚くことにラビは敢えて敵陣の
中へと飛び込んだ。

そして、いきなり二人の人間が宙を舞った。

マジかよ、と上条は驚愕する。今のは、さっき樂斗を倒したのと
同じ蹴り技で、今度は両足を使って二人いつぺんに空中へ蹴り飛ば
したのだ。その後も連中の間を縫うように駆け抜け、今度は脚を大
きく振り上げ、すぐそばの男の顔面を蹴り飛ばす。

その様はまるで竜巻のようだと上条は思った。多分、何か格闘技
でもやっていただろう。

そうこうしているうちに、いつの間にか相手のヤクザは三人だけ
になっていた。

何だかこれ以上は無駄な争いというか、弱いものイジメに思えて
きた上条は、そろそろ止めに入ろうかとも思ったのだが、

「って、これってチャンスなのでは？」

そう考えて、先程までの自分の境遇を思い返してみる。

（さっきまで私、上条当麻は絶体絶命の事態にあったわけですが、
それを彼に助けられたわけで……。でも、その彼も何だか
俺に用があるらしい。けど多分、とても不穏な内容の用事である可
能性がめっちゃ高いんだよなあ。それにこの後、俺は合コンに行く
約束をしてしまったているし。なら、今俺が取るべき行動は）

「……よし、逃げよう」

これ以上彼らに関わると大きな不幸に巻き込まれるぞと、上条の長年培われた不幸の直感が告げている。今日のところは、これ以上の不幸は許容できない。なので彼らには、遠いところで幸せになってもらおう。

ふと彼らの様子を見ると、ヤクザの連中はあと二人になっていた。
(い、今しかない！)

上条は足音を立てぬよう、忍び足でその場を後にしようとする。しかし。
相手のヤクザの一人が、ナイフを抜いたのを見ってしまった。

「ッ！？ つの馬鹿」

野郎がッ！！ と上条はラビの方へと駆ける。ただの喧嘩なら見逃しても良かったが、刃傷沙汰となると話は別だ。人が血を見るのを黙って無視できるほど、上条は冷徹ではなかった。

だが、その前に相手の凶刃はラビに到達していた。

「ラビっ！！」

「ん？ 心配してくれてるの？ はは、ちょっと嬉しいな」

え？ と上条はその場で硬直する。よく見れば、ラビは相手の腕を完全に押さえつけていた。

「危ないなあ。こういうのを喧嘩で使うのって、ルール違反じゃないの、かなっ！？」

そう言っつてラビは相手を一本背負いで投げ飛ばす。その勢いで、その男は壁に叩きつけられ、そして気絶した。

「ふう。さて、残すはあと一人、だね」

あー疲れるなあ、とため息をつきながら言うラビ。その様子からもう彼へのフォローは不要だということを知り、そして上条は自分がすべきだった事を思い出した。

(やべ、急がねーと……)

意を決した上条はラビ達に背を向け、再び忍び足で逃亡を試みる。

背後の気配からもラビはまだヤクザと対峙しており、こちらに気付いた様子は無さそうだ。

そろりそろりと忍び足で進み、すぐ近くの曲がり角まで到達した上条は、そのままするりと曲がり角の内側へ身体を滑り込ませ、

直後、その目と鼻の先でこちらに軽く手を振って微笑むラビを發見した。

「う、うわあ!？」

目の前の信じられない光景に、上条は反射的に叫びながら慌てて後ろに下がった。

な、何でここにラビがいるんだ!？ そう思い後ろを振り返ったが、既に最後の一人は倒され、そこには既にラビの姿はなかった。

「ボクを出し抜こうなんて、酷いなあ……ショックだよ。せっかく助けてあげたのにさ」

そう言つて、足元にある石ころを蹴つていじけてみせるラビ。

だが、そんな表情もすぐに一変し、満面の笑顔でラビは笑った。

「さて、良い準備運動にはなったかな。それじゃ、始めようか。上条当麻」

ドッヘルゲンガー

「幻影分身」

ラビという少年は言葉より行動で何かを示すのが好きなようだ。

「じゃ、こっちからいくよ」

次の瞬間、こちらが何かを言うよりも早く、強烈な蹴りが上条の顔を襲う。

「う、おおおおおおおッ!！」

ラビの右足から繰り出された蹴りを、上条は左腕で受け、そのまま流す。だが、あまりの衝撃に受け流した腕の関節が嫌な音を立てた。

「何、しやがるッ……!?」

「へえ、やるじゃん。でも、そろそろキミも能力使ったほうが良いんじゃないかな? ボクも能力でのバトルとかしてみたいし」

「いや、そういう問題じゃねーだろ!? という言葉を飲み込みながら、上条は言った。」

「いや、だからお前誤解してるって! 俺は無能力者(レベル0)なんだぜ? だからお前の望むような能力バトルなんてできねーよ! 無駄な争いを回避しようと、上条は懸命に事情を説明しようとする。だが、途端にラビの表情が険しくなる。」

「嘘つき」

「う、嘘じゃねえよ! 学園都市の能力値測定レベルスキャンの結果でも見ればいいだろ!? それで真正銘、俺が無能力者であることが分かるはずじゃねーか!」

事実、学園都市の能力値測定の結果はとても正確である。幻想殺し(イマジブレイカー)や貧弱な肉体再生オートリパースのような、AIM拡散力場すら展開できない完全に受身な能力でもない限り、能力持ちで無能力者のレベルを貼られる事はまずない(姫神の吸血殺し(デープブラッド)は一応測定方法が存在するらしいので別。多分AIM拡散力場によるものだと思われる)。故に、力を示すものとしては十分根拠も説得力もあるものなのだが。

「ボクは、ね。嘘つきが大っ嫌いなんだよね!!」

ラビが、今まで見たこと無いほどの怒りに満ちた表情で上条を睨む。

「ただの無能力者があの一方通行を倒すなんてできるはずないだろ。馬鹿にしてるのか?」

「いや、だからそれは」

「言い訳は止めなよ……もう言葉はいらない」

そう言っつて、ラビは深呼吸をする。

「そっちがそういうつもりなら、無理やりにも力を使わせてあげるよー!」

ラビの目がこちらを見据えた。次の瞬間、

「ごんっ、と上条は後頭部に衝撃を受けた。

「ぐ、はっ……」

危うく一発で意識を失いかける威力だった。しかし、それを耐えた上条はよろめきながらも後ろを振り向く。

すると、そこには踵落としのモーションをした後のラビがいた。

「どう？ これはボクの能力によるもの。流石に、能力は使わないなんて甘い事言ってもらえないでしょ？」

「こ、これは、まさか」

そして、上条は正面を向く。すると、そこにラビの姿はなかった。

「ま、まただ。またいなくなっただけやがる……」

「ふふ、キミにボクの能力が見破れるかな？ まあでも、せめて見破るくらいはしてほしいね」

くそ、と悪態をつく。一見、テレポート瞬間移動やキルポイント死角移動の能力に見えるが、この能力には、一つ大きな謎がある。

もしこの能力がテレポートだとしたら、“何故ラビが目の前にいる状態で、別地点からラビに攻撃されているのか”？ まず、瞬間移動で生身の攻撃をするならば、自分自身が消えてからでないとして別地点からは攻撃できないはず。まさか、自分がもう一人いるわけでもあるまいし……

「考え事するのも良いけど、油断はしない方が良いよ」

「っつて、うわっ！ ……またどっから湧いてくるんだお前は!？」

「湧くって……いやな言い方するなあ」

またしても背後からやってきたラビの攻撃を今度こそ避けた上条だが、連続の不意打ちによる緊張で少し疲弊し始めている。だが今の攻撃で、一つの可能性を考慮する余裕ができた。

もしかすると、ラビの本当の能力は自分の分身を作り出す能力な

のでは？

あながちそれで合ってるのかもれない。もう一人の自分を作り出す能力ならば、今こっやって別の場所から攻撃を受ける理由としては十分説得力がある。作り出した分身を密かに潜伏させ、隙をつけて攻撃、消滅させればいいのだ。

だがしかし、そうなるともう一つの謎が浮上する。

上条は常にラビへ視線を向けている。なのにいつ彼は分身と入れ替わり、そして上条の背後にまわったのか？

ラビが背後から攻撃を仕掛けた後、気付いた時には必ずさっきまでの彼は消えている。レポートを使えば可能だとは思うが、そうなる^{デュアルスキル}と彼は二つの能力を使いこなす『多重能力者』であるという事になる。しかし、『多重能力者』は理論上は実現不可能とされているはず。ならば一体どういう事だろう？ まさかとは思うが……

……迷っていても仕方ないな、よし。

「なあ、ラビ」

「うん？ 何だい？」

「お前って、多重能力者？」

それとなく、普通に聞いてみた。

「うん、ボク 능력は一つだけだよ。あと、馬鹿正直に聞いたって正体までは簡単に教えたくないなあ」

そっか、じゃあ一体何なんだ？ と上条は結局、余計に悩んでしまっ。

「てつきり自分の分身を作っておいて、その後自分をレポートさせてるのかと思ったんだが……。そうか、やっぱ違うよな」

「あ、それ大体合ってるよ。ほぼ正解。よく分かったねえパチパチ」

「うん……って、はい？」

パチパチとラビが手を叩きながら言う。しかし、あまりに唐突だ

つたため、一瞬彼が何を言ったか理解できなかった。

一体どういうことでせう？ と上条は聞き返す。

「そうだね。そろそろネタバラシしようかな。“どうせ分かって、攻略不能である事には変わりないし”」

ラビは、両手を左右に広げる。そして次の瞬間、

ラビの中から、もう一人のラビが出現した。

「うわっ」

「あはは。ビックリした？」

そして、現れたもう一人のラビは、ラビの隣で仁王立ちをする。

「紹介するよ。ボクの能力は『ドッベルゲンガー幻影分身』。対象の分身を作り出し、その対象と分身の位置をいつでも入れ替えることのできる能力。そして

「ボクは超能力者（レベル5）の原石だ」

原石。

それは、学園都市の外で偶然生まれた、学園都市の能力開発と同じ環境が自然に整った場合に生まれる天然の能力者を指す。だが、原石は滅多にいるものではない。学園都市の中では、吸血殺し（デーパーブラッド）の姫神や第七位の超能力者である削板軍覇がそうである。また、削板軍覇は世界最高の原石といわれている。

普通、原石として外で過ごす能力者達は、自分の能力を隠して過ごす事が多いとされる。能力の露見は、自分にとって危険を呼び込む事に繋がるからである。既に能力もちである彼らにとって、普通にただの学生としてやって来る以外には、わざわざ学園都市に来る理由はまず無い。なのにわざわざ来るといふことは、『何か学園都市に対して特別な目的を持っている場合』、『学園都市によって招

待、又は誘拐されて来た場合』、『学園都市の外で何か問題を起こし、外の世界では居られなくなったため連れて来られた場合』のどれかの理由であるといえる。

そして、現在学園都市に七人しか居ない超能力者（レベル5）の中で、『幻影分身』という能力者がいるという話は聞いたことがない。

つまり彼は、外から学園都市に新しく来た、八人目の超能力者だということだろうか？

「さて、ボクの方は能力もネタバラシしちゃったし、そろそろキミの能力の方も知りたいな」

あはは、と二人に増えたラビは笑う。

確かに、相手が常に位置を入れ替えられる関係にあるというならば、攻略は不可能なのかもしれない。上条の幻想殺し（イマジンプレイカー）は、『それが異能の力であるならば、例え神様の奇跡でも打ち消せる能力』を持つが、効果は右手の手首から先にしかない。なので例え分身でも、背後から攻撃されれば普通にくらう。そして本物に羽交い絞めにされ、右手を押さえられでもしたら、分身に一方的に攻撃されて終わりだ。例えこちらが先に相手を捕らえたとしても、分身と入れ替わられたら分身は消えるが本物は無傷。そしてラビはもしかしたら、あの分身を何度も出現させる事ができるのかもしれない。消耗戦となったら、上条の勝ち目は薄い。

ある意味、複数のゴロツキをいっぺんに相手するよりやっかいかもしれない。自らの危機を感じ上条の頬を冷や汗が伝う。

だが、ふと気付いた。

ラビは、上条の能力を知らない。

上条と一方通行との戦いについて知ってる素振りを見せていたので、てつきり能力も知られているものと最初に思い込んでしまっていたが、彼の言動から察するに、上条の能力については本当に何も知らないようだ。

……となると、勝ち目はあるかもしれない。

上条は握り拳を作る。そして、それを目の前に突き出した。

「いいぜ、ラビ。お前の勝負、受けてやるよ」

「へえ、良い目付きになった。やっぱり何か能力を持ってるようだね。何だか興奮してきたよ」

上条の様子が変化したのに喜びを隠せないラビは、舌なめずりをしながらそう言った。

相手の能力を知っている事と知らない事。その差に、逆転のチャンスはある。

先手必勝。

上条の武器は己の拳のみ。相手も格闘術が得意なのだろうが、路上の喧嘩には多少自信がある。別に汚い手段を使うつもりは毛頭ないが、多少の小細工くらいは使ってもいいだろう。だがそのためにはまず、相手に接近しなくてはならない。その為の先手必勝でもある。

しかし、上条の思惑はすぐに打ち崩された。

駆け出した直後に、唐突に背中に衝撃を受けたからだ。

「うがつー！」

体勢を崩し、前のめりに倒れそうになる上条は、とっさにその場で受身をとりながら地面を転がる。そして自分の背後からの衝撃の正体を確かめるため振り向き、絶句する。

「ラビ、が………三人!？」

そう。背後に居たのは間違いなく、ラビであった。

「あははははつ。そうそう、言い忘れてたよ。実はボクの幻影分身は、同時に二人までだせるんだよね」

「そして、ドッペルというと大概の奴が『一人しか分身を作れない』と勝手に勘違いしてくれる。単なる通り名に過ぎないのに、ちよろ

いもんだよね」

あはは、とラビが大笑いしながら言う。その隣のラビの分身も、ニヤニヤと薄気味悪い笑い方で上条を見下ろしながらラビの言葉を継いだ。

「さて、ボクはこれから本気を出す。だからキミも本気でこないと、
.....死ぬよ？」

本物のラビがそう言った直後、三人目のラビが上条に追撃する。ラビが死ぬというだけのことはある。三人目のラビは、助走をつけて地面に転がったままの上条に飛び蹴りを仕掛けようとしていた。まともにくらつたら、場所によっては即死できる威力なのだろう。

反射的に上条は地面を転がる。三人目のラビの蹴りが、ギリギリの所で上条の頭の横を通りすぎ、上条は紙一重で難を逃れた。

しかし、ラビの動きは早い。着地した直後、そのまましゃがんだ状態で両手を地面に着き、そこから手をバネにするように水平に上条に向かって両足を蹴りだした。

ドンツと肩口を蹴られ、更に地面を転がる上条。

すぐさま立ち上がった三人目のラビは、その頭をサッカーボールのように蹴り飛ばそうと助走をつけて蹴り足を上条に向けて放った。それが渾身の一撃になるであろう事は容易に想像できる。これをくらえば、その瞬間上条の意識は刈り取られるかもしれない。

「ちつつくしょうがああッ!!」

自らの危機に上条は絶叫し、右手を三人目のラビの蹴り足に向けて伸ばした。

上条の右手と触れる。その瞬間、三人目のラビは消されたテレビの映像のように呆気なく消滅した。

「.....え？」

目の前で起きたことが信じられない。そんな心情が簡単に見て取れるほど、ラビは目を見開き、驚愕していた。

「な、何が起こったの？ はは、まさか.....これがキミの能力？ 人間をまるまる一人、消しちゃう、なんて.....」

ラビは未だに動揺を隠せていない。そして上条はこのチャンスを見逃さない。その隙に立ち上がり、無言でラビとの距離を詰める。

「くっ。ず、随分物騒な能力だね、人ひとり消し去る能力なんてさっ！ キミが能力使うのをずっと渋ってたわけは、こういうことだったんだね!？」

慌ててラビは上条と距離をとり、そして偽者を上条の背後に回らせる。そして、またしても正面のラビは二人目の分身を生み出した。「下手に近づくのは危険、ってことだね。でも、甘いキミのことだから、そんな力をボクに直接使うつもりはないんでしょ？ それで、どうやって決着をつけるつもりなんだい？」

「一発ぶん殴る」

ラビの問いに、上条は簡潔に答える。

「ふうん……、良いねそれ。一発で決着をつけようって事だね」ラビは頷き、「なら、こつちも実は一回で決着をつける方法があるんだよ。キミに一回、直接触れるだけで良いんだ。お互い、一回で決着がつくって訳だね」

「ああ、それでいい」

それは上条にとっても願ってもない条件だった。要するに、本体であるラビが向こうから近づいてきてくれるわけである。先程は警戒されてチャンスをフイにしたかもと思っていた分、接近戦は望むところであった。

上条は正面と、背後のラビの動きを警戒しながら、少しずつ距離を詰めていく。

「うん、いいね、ドキドキする。今のキミを見ると、凄い興奮してくるよ。流星は一方通行を倒したことはあるね。……それじゃあ、先に仕掛けさせてもらうよ!!」

そう言うのが早いか、三人のラビは上条に向かって駆け出す。

それと同時に上条も正面にいる二人のラビに向かって駆け出した。

「おおおおおおおおおっ!!」

上条は裏拳ぎみに拳を横に振るう。向こうもこちらの攻撃を警戒

していたのか、左のラビがスウェーで拳をかわし、右の分身はそのまま蹴りで顔面を狙う。

上条は右手の軌道を少し変え、分身の蹴り足と接触させる。そして、分身は消滅した。

「やっぱり、『右手』にその力があるようだね」

上条の行動をずっと観察していたのだろう。そう言ってラビは低い姿勢をとり、接近してきた。そして上条の背後から接近していた分身が上条の右腕を両手で押さえつけようとする。

背後からの接近に気付かなかったわけではない。なので、振り向き様に押さえつけようとしてくる腕を右手で叩き、もう一人の分身も消滅させる。

その隙に、ラビは上条の左手を捕まえた。油断はしていなかったはずだが、右手を封じられると焦ったせいか、一瞬本体の方の注意を散漫にしまった。

勝った！！ とラビは叫ぶ。

だが、

「……………え？ あ、あれ？」

なにやら様子がおかしい。先程まで勝ち誇っていた顔がどんどん曇っていく。

「な、何で？ 何で？ な、何で出ないんだようっ!？」

「で、出ないって、……………何が？」

一人慌てるラビに、様子がおかしい事に気付いた上条が問いかける。

「分身が……………、キミの分身が出てこないんだっ!」

「……………あー」

何だか状況が読めてきた。

「つまり、アレか？ お前は、俺の分身をつくって、その能力を使って同士打ちさせるとか、どこか危険なところで位置を入れ替えるぞと脅して、それで勝とうとしてたわけだ」

「……………うん」

コクリと、ラビは頷く。

上条はそれで納得した。ラビの能力『ドッペルゲンガー』は相手に直接接触することにより、相手の分身を作り出すことができる能力。つまり、“相手の全てを完全にコピーした分身を作り出すということ”。その過程で、異能の力であるラビの能力そのものが右手に干渉してしまったため、ラビの能力が打ち消されているのだ。

「えーと……」

上条は思考する。現状としては、相手の奥の手を思わぬ形で潰してしまっただけだが、逆に上条の奥の手はまだ健在である。その優位を利用しない手は無い。

「なあ、ラビ」

「な、何だよ？」

上条はバツと右手を振り上げてみた。

「うひゃっ」

ビックリしたらしいラビはとっさに距離をとろうとしたが、左手は繋がったままだ。結果として、ラビは中腰になりながら手を顔の前によせ、ビクビクとこちらの様子を窺っている。あ、うっすらと目に涙が溜まつてる。本気でビビッたようだ。

前にもこんな事があつたような、とか思いながら、何だがまるで女の子を苛めてるように思えてきてしまった上条は、今更ながらそのラビの女の子っぽい表情や、繋いでいる手の女性的な細さを感じ、何故かドギマギしてしまう。ちなみに、上条は記憶を失っているため、以前御坂美琴と決闘した時に同じような状況になった事を知らないのだが……。

「い、いかん、イカンぞ上条当麻！ そんな、あまりに最近ピンクな出会いがないからといって、ちょっと女の子っぽい男にまでそんな……。お、俺は、俺ってやつはーッ！！」

「だ……大丈夫？」

ぐおお、と意味不明な唸り声をあげて呻く上条に対して、ラビは不審者を見るような目で見つめながら、軽く一歩引いていた。

数十秒ほど、何やら苦悩していた上条だが、ふと自分がずっとラビの手を握りっぱなしである事に気がつく。

「わ、悪いっ」

すばやく手を離そうとする上条。だが、その時ラビの方も上条の手をしっかりと握ったままだったため、結果的にラビがそれに引っ張られる形になり、そして躓いた。

結果、ラビが上条を押し倒す形で倒れこむ。

「うわわっ!」

「どわっ!」

ドシンツという音とともに、二人は地面に倒れた。見た目どおりというか、ラビの体重が思ったよりも軽かったため、対したダメージにはならなかったが、

「だ、大丈夫か?」

一応ラビにそう声をかけておく。今のは焦りすぎた自分の不注意だと上条は思ったからだ。

しかし、ラビは全く反応を示さない。

どうしたのかと、ラビの顔を覗き込む上条。すると、ラビは顔を真っ赤にしながら自らの胸元を注視している。

上条の右手に押さえられた胸元を。

そして、上条は自分の右手の中に、何か大きく柔らかいものがある事によく気がついた。

グニユ、と上条が右手を動かすと、その動きに合わせてそれも形を変える。同時に「ひゃっ」とラビが声をあげた。

「こ、この物体はもしかしてもしかすると……?」

「い、いいいいつまで触ってるんだよバカあつ!」

「うわっ、わ、悪い!」

そう言って上条は手を離す。すぐさまラビは上条の上から飛び退き、近くにあった壁にへなへなともたれかかる。

だが、そうなるとラビは。

「お前、……女の子だったのか」

「う………、ううううううううう！」

ラビは、それを否定せず、そのままその場に座り込む。つまり、それはその事を肯定したということ。

その様子から、ラビは今まで自分が女の子である事を隠していたのだという事を悟る。今までボク口調であったり、小僧だの何だのと男の子のように言われてもそれを訂正しなかったことも、全てはそこに繋がるのだろう。

だが、彼 いや彼女は、何故そのような事をしなければならなかったのか。そこに、彼女なりの秘めたる事情があるのだろうか。今のラビは、まるで迷い込んだ荒野の隅で震える小ウサギのように小さく見える。

先ほどまでの元気なラビを見た後だった分、そんな状態のラビを見ているのは辛かった。

「ラビ、お前は「うるっさいよっ!!」

上条はラビに声を掛けようとしたが、その声はラビの強烈な怒鳴り声で掻き消される。

「………ボクはね、ここでは強くなっちゃいけない。自分の居場所を保っていられるくらいの強さを誇示し続けなくちゃいけないんだ………」

ラビは上条の方を振り向く。その目から、ぽろっと一滴の涙が流れるのを上条は見た。

「さっき言ったよね、ボクは原石だって。ボクはね、外から連れてこられたんだよ。ボクは外で力を悪用して、人を傷つけた。だから、家族にも見限られ、学園都市の人間に連れてこられたんだ」そして溢れ出た涙で濡れた顔のまま、無理やりラビは自虐的に笑う。「バカみたいでしょ？ 自分に特別な力がある事を自覚した瞬間に、まるで自分がこの世の王様にでもなったみたいに感じて。邪魔する奴もこの力で影から痛い目みしてやって、それで悦に浸って………」

「そしてついに、ラビは自分の顔を手で覆って、絶叫する。「それで結局今までのことも全部自分のせいだってバレて、そして皆に

超能力者だつてバレた！ それまで仲の良かった友達にも忌避されて、最後の頼りだった家族も表面上は優しげだったけど、結局は変な目で見ていたんだ！ その証拠に、事件が表沙汰になる前にやってきた学園都市の人間が来たときも、お母さんもお姉ちゃんも結局最後の最後まで何も言わずにボクを送り出した！ 当たり前だよ、何期待してたんだろ？ 今まで自分勝手に人を傷つけていた自分が、今更家族にだけは守ってもらえるなんて甘い幻想抱いてさ！ そんな事、ちよつと考えればすぐ分かる事なのにね………だから

「ボクにはもう、この学園都市しか居場所はないんだ」

ラビは絶望したかのように地面を見つめながら言う。本当は家族も友達も全員好きで、皆とずっと一緒に居たくて。でももう一緒にはいられない。事実上、今生の別れを迫られた。そして、その原因を作ったのも自分自身であり、自分以外の人間を責める事はできない。

ならばと、せめてこの学園都市で生き抜く事を決めたのだろう。一から全てをやり直すしかないと思つたのだろう。しかし、そのためには力が要る。自分自身を破滅に追い込んだ力で、今度は自分自身の居場所を手に入れるために。

もしかすると、彼女がここで男の子のように振舞っていたのは、自分を少しでも強く見せるためか、過去の自分と決別する意味があったのかもしれない。

「か野郎」

だからこそ、

「馬つ鹿野郎が……！」

上条は、ラビを許せなかった。

「ッ」

上条の怒鳴り声で、ビクリとラビの身体が震えた。

「馬鹿じゃねえのかお前は！ 何勝手に決め付けて勝手に絶望してんだ！！ そうじゃねえだろ！」 上条には、分かる。「お前、何自分の家族を低く値踏みしてんだよ！！ 何で、家族が自分を見限ったなんて勝手に決め付けてんだよ！」

上条は記憶喪失である。

しかし、海の家での事件が起こった時、過去の思い出話のつもりで父 上条刀夜は教えてくれた。

上条は、とても不幸だった。ただそれだけで子供の頃、疫病神扱いされた上条は近所の子供に石を投げつけられた事があるらしい。そして、その親ですらそれを止めるどころか、何故もつと投げつけないのかと急ぎ立てていた。

そんな上条をいつも守ってくれていたのは、他ならぬ家族であった。

そして、父である上条刀夜が上条を学園都市に送ったのも、我が子の身を案じての事。決して厄介払いがしたいからではない。

上条は、本当の家族がどういうものかを知っている。

今まで一緒に暮らしていた家族が、いきなり我が子を手のひら返すように見捨てるなんて事をしないことも知ってる。

息子の不幸を嘆き、息子のために自分でも叶うとも思わないものにもすがり、そして息子のために自らを犠牲にする覚悟を決められる父親を知っているから。

ラビの家族だって、もしかしたら送り出すときに一緒に涙を流して送り出したかったのかもしれない。でも、そうするとラビ自身の決心が鈍るから、泣く泣くそれを我慢して見送ったのかもしれないじゃないか。

かつて、上条を笑いながら送り出してくれたという、上条夫婦のよう。

なのに、家族の事をちゃんと見ないで、勝手に自分の価値観で相

手を値踏みして。それなのに自分だけ勝手に家族に絶望するなんて、そんなの絶対に間違っている。

「俺も、お前と一緒にだよ。外の世界じゃ居られなくなって、それで俺の父さんは周りの人間から俺を守るために、俺を学園都市に送ったんだ。お前の家族だって、お前を周囲のしがらみから守りたいと思ってる、この学園都市に送り出してくれたのかもしれないじゃねえか。なのに、何勝手に絶望してんだ!!」

家族の事をまともに見ようともしていなかったラビに、上条は本気で怒っていた。

すると上条の怒りに堪えるように、ラビは両手でフードの縁を掴み、そのまま顔をスッポリと覆う。そして、弱弱しく呻いた。

「そ、そんなバカな話が……」

「馬鹿でも何でもねえよ。お前は今まで自分の家族を見てきたはずだろ？ その家族は、本当にお前を簡単に見捨てるような家族だったってのか!？」

上条の問いに、ラビは数秒の間を置いた後、無言でフードで覆われた頭を振る。

本当は、ラビも薄々気付いていたのかもしれない。ただ、自分の境遇を呪って自棄になって、それで家族のこともまともに見ないようにする事で、期待と違った当時の家族の対応に対して納得して楽になってしまいたかったのかもしれない。

ラビの反応を見て、上条はようやく安堵したように笑った。

「なら、大丈夫だ。お前がひよっこり帰ってきたとしても、向こうは笑って迎え入れてくれるはずだって」

上条はそう言ってラビに歩み寄り、フードの上から頭をポンッと軽く叩く。

ラビはビクリと震えた。しかしその手を払いのけるようなことも無く、ラビはそのまま頭を撫でられたまま沈黙する。そして、
「……うん」

ラビは、ゆっくりと頷く。それを見て、また上条は笑った。

そうして、また沈黙が続く。しかしそのうち、ラビが声を発した。
「……………ボクは、ここに来るまでに力で何人も傷つけてた。
それなのに、ボクなんかが家族に助けられて、本当に良いのかな…
……………」

不安そうに呟く。そんな彼女に、上条は問いかけた。

「お前は、自分のやったことを後悔してんのか？」

「……………うん」

「後悔して、お前はこれからどうしたいと思った？」

「……………ホントは、どうすれば許されるかなんて見当もつかないけど。もしもう一度皆に会えるなら、謝りたい。ごめんねって。今まで自分勝手に傷つけたり、利用したりしてごめんって。本当はもう一度、やり直したい。償いたいよ……………」

鼻を少しすすりながら、ラビは言葉を紡ぐ。その言葉に上条は満足したように、

「なら、今度はここからそれを始めりゃ良い。お前がその気なら、俺が協力してやる」

そう言って、再びラビの頭に軽く手を置いた。

「……………」

ラビは、そのままずっと沈黙していた。その間、ぐしぐしと涙を拭う音だけが空間を支配する。そして、その沈黙は再びラビの言葉によって破られた。

「上条、当麻」

そういうと、ラビは唐突に立ち上がった。そしてラビはフードを取り、上条に向かって涙の跡が残る顔で、今出来る限りの満面の笑顔をつくり、言った。

「ありがとう」

結局のところ、この家族や友達の話は既に過ぎたことである。実際には、ラビがこれからを学園都市で生きるために、実力で社会的

地位を高めなくてはならない事の方が本題だ、とラビはいう。

「たとえ家族がボクの事を受け入れてくれるとしても、ボクはもう帰る事を考えるつもりは無いんだよ。この力がある限り、あの時のしがらみは付いてまわるからね」

そう言っただけでラビは笑う。今のラビの笑いは、何かから開放されたかのように、すっきりとしていた。

「そんな事より、ボクは今、この学園都市で生き抜く術を見つけないかならない。あの一方通行や超電磁砲だって、よく挑戦や闇討ちを受けるって聞いたしさ。でも、昔の一方通行は誰もがビビって関わり合いになりたがらない程強いつて聞いて、ならそれを倒したと、当麻を倒せば、自分を襲ってくる奴はいなくなる。そう思ってたんだけど、もうそんなつもりは無いしね」

ラビは頬を少し染めながら言う。先ほど、上条はラビに「えっと・・・と、当麻って呼んでも良いかな？」と聞かれ、それを許すからというものの、何やら赤くなりながら名前を頻繁に呼ぶようになった。インデックスにも同じように呼ばれているが、ラビに顔を赤くさせながら呼ばれると、何だか少しこそばゆく聞こえるから不思議だ。

「生き抜く術、ねえ。普通に生活はできねーの？」

上条は一応聞いてみたが、ううん、とラビは首を振る。

「だって、こう見えてもボクは超能力者（レベル5）に認定されるんだよ？ 超能力者（レベル5）の順位付けて、何だか世襲的なところがあるらしくって、超能力者（レベル5）を倒すと、そいつが超能力者（レベル5）に認定されることがあるって噂が出回ってるんだ。本当はただの噂かもしれないけど、そんな甘い幻想に釣られて、実際に超能力者（レベル5）に突然襲い掛かる人がいるんだよ。今までにそれで敗れたっていう超能力者（レベル5）の人は居ないらしいけど、ボクはそんなのにずっと耐えられる自信は無い…」

ラビはそう言っただけで目を伏せる。彼女がこの学園都市で強さを求め

ていた理由はそういう事だったのか、と上条は納得した。そして、ラビがその恐怖と重圧プレッシャーにずっと耐えていた事も、上条には理解できた。

だから、上条は言ってやった。

「安心しろよ」

ラビに対して 自分を取り巻く恐怖に怯える、ただの女の子に対して、上条は言った。

「もし、お前を倒して名を上げようなんて幻想を抱いてる奴がいるんだったら、そいつらのそんな幻想は全部、俺がこの手でぶち殺す。お前の危機には、すぐにでも駆けつけてやる」

だから、と上条は続ける。

「もう心配すんな。お前はもう、一人じゃねえだろ」

にっ、と上条は笑う。流石の上条も右手一つで全てのものからラビを守ることはできない。だが、その危機に気が付いたら、すぐにも駆けつけるくらいはできるはずだと思っている。そして、ラビの心配を和らげるための今のセリフをラビはどう受け取ったのだろうか。

ラビは、突然上条から背を向けて走り出した。

「お、おい、ラビっ！」

上条は制止の声を上げるが、ラビが立ち止まることはなく、そのまま目の前の道の角を曲がって行ってしまっ。

ラビの後を追いかけて上条も角を曲がる。しかし、その先に彼女の姿は影も形も無かった。

ラビは、上条を撒くために道がむしゃらに走り回り、そして近くの裏路地に入ると、そのままその場に座り込む。

ラビが逃げ出した理由。それは、

「見せられ、ないよ。……こんな顔」

上条に言われた最後の一言。あの言葉を言われた瞬間、顔が猛烈

な熱を持ったことを自覚した。そして、目や鼻から暖かいものが流れ出そうな感覚を感じた瞬間、思わずラビはその場から飛び出していた。

ただ恥ずかしかつたからとかそういう理由ではない。先ほどまでの自分は、あまりにも嬉しすぎて、感情の押さえがきかなくなりそうだった。そんな自分ではあの場でまともに上条と対面することが不可能だと思ったから、その場から逃げ出してしまったのだ。

「う、嬉しくつ、て。恥ずかし、くつて……、ズズツ、もう、しわけ、なくつて……。もう、どうしよ、うう」

流れ出る涙や鼻水を手で拭いながら、ラビは混乱した心を落ち着けようと努力するが、無駄だった。今まででここまで嬉しかったことがあつただろうか。薄っすら覚えてるのは家族に誕生日を祝ってもらつた時や、中学生の頃に部活のテコンドーの公式試合で優勝した時。しかし、今のこれはそれらとは違う、比べ物にならない程の未知の嬉しさだった。そして、これが今までで一番の「嬉しい」なんだという事を、ラビはようやく理解した。

ラビはぐずりながら、思う。

何故、彼はあんなに強いのだろう。最強の右手があるから？

違う。ただ最強の右手を持っているだけなら、あんなに強い心を持つことには繋がらない。あんな、どこかのヒーローみたいな事を本気で言える人とは出会つたことが無い。彼ならば、ピンチの時は本当に駆けつけてくれるのだろう。今なら、そう確信できてしまう。

彼と自分の差は何なのだろう。何が彼と違うのだろうかと、ラビは疑問を持った。生まれか、親か、周りの人間か。はたまた性別の違いか。今まで彼は自分と同じで周りに疎まれ、それで学園都市に来ることになつたと言っていた。ならば、どうして彼は自分と違い、どんな敵が来ても平気だと言い切れる程の強さを持っているのだろうか。ラビはずっと思索し続けた。そして、何を食べたらあんな風になるのだろうかとまで考えたところで、少し可笑しくて笑ってしまう。

そして、

いつの間にか、ラビの心はとても落ち着いていた。

「上条＝不幸（変わらない日常）？」

あの後、上条当麻は約束の時間ギリギリになって、ようやく待ち合わせ場所のパン屋の前に到着した。ラビが走り去った直後に、携帯で時間を確認したところ、待ち合わせの時間の30分前になっていた。なので上条は慌ててその場から直行してきたのだ。

「おう、カミヤん。何とか間に合ったようだよー」

「流石の上条さんも、初めての合コンには少し緊張しちゃったんやねー。分かる、分かるでその気持ち。でも安心しいやー。カミヤんが初めてやって事を先方に伝えたらな、向こうがちゃんとリードしてくれはるって。よかつたなあカミヤんっ」

着いてすぐに、土御門と青髪ピアスが声を掛けてくる。相変わらず、青髪ピアスのテンションは高かった。

「っーか、何先方に勝手に初心者だつて言っちゃってんだよ！ 実は私上条当麻は熟練者という設定で、『安定感のあるオトナな人間なので、頼りにしてくれても良いぜ』的な展開を演出しようとしてたつてのにー！！」

「何言つてんだ。カミヤんに熟練者な雰囲気なんてどっから見ても皆無だにやー。無駄な足掻きは止めて、カミヤんは大人しく年上のねーやんにお任せした方が無駄な恥をかかずに済むぜよ」

青髪ピアスの余計なおせっかいに講義する上条を土御門がなだめる。何だかんだで、三人とも無駄にテンションが高い。

ちなみに、ただ一つ確かなのは、

この三人の中に合コンの熟練者など一人もいないという事であった。

結局、今回の合コンは、上条はどこまでいっても上条であるという事を証明するだけであった。

その後、待ち合わせ場所にきた三人の女の子を見て、「おおーっ」と歓声を上げる三人組。お相手のレベルが思ったより高かったこともあり、三人のテンションは最高潮に達していた。

その後すぐに皆でカラオケにでも行こうという話になり、いざ鎌倉、という感じで意気揚々と店に乗り込む。しかし、その際に上条は財布を確認し、「あ、そういえば買い物で使ったから金足りないけど、払いは青髪ピアス達持ちだから関係ないな、あっはっは」と笑っていたのだが、

そういえば、今日の買い物せんじゆの袋はどこへやった？

上条はその事に気がついた瞬間、「あーッ！！」と絶叫していた。突然の上条の叫びに皆が驚き、何だ何だと周りもざわめき立つ。

そういえばと上条は思い出す。今朝の買い物を終え、その後、運悪く樂斗らとぶつかり、そして彼らから逃げるために“その場に買っ物袋を置いて”逃げていた。

「ん〜？ どないしたんやカミヤん？」と顔面真っ青な上条に青髪ピアスが声を掛けてきた。すぐさま上条は近づいてきた青髪ピアスの肩を捕まえ、「悪い！ 実は大切な用事があったんだ！ 本当にスマンっ！！」と言ってダッシュでその場を後にする。後ろから土御門たちの制止の声が聞こえたが敢えて無視した。今後一週間の飯と今のひとときを天秤にかけた結果として、今後一週間の飯の方が重かったというだけの話である。

全力疾走の末、何とか買い物袋を置いた現場に到着した上条。しかし、既にそこに今日の戦利品は存在していなかった。

もしや近くの交番に届けられているのではと思い、近所の交番を数箇所まわってみたものの、その全てが外れであった。そして、上

条は最後の交番で届出無し（死刑宣告）を聞いた後、その場に崩れ落ち、絶叫した。

「ふ、不幸だあああああああああッ！！」

日が沈み始めた黄昏時、上条は両手に大量の野草を抱えたまま、のらりくらりと生気の無い顔のまま自分の寮へと続く道を歩いていた。結局買ひ物袋を見つけられなかった上条は、せめて野草でも持って帰って、今晚の腹の足しくらいは作っておかなければと思っていたのだ。

そして、ようやく到着した自分の寮を絶望の眼で見上げる。途中、余りにも怪しい状態の上条を見た人々が、自分を避けるように道を空けてくれたため帰りやすくはあったが、何か人として大事なものを失ったように思うのは気のせいだろうか。

自分の部屋へと向かいながら、今晚インデックスに何て言って誤魔化せば良いのだろうかと思案する。それ以前に、昼飯も作らずインデックスを放って一人合コンに行ってしまった後ろめたさもあって、余計気が重くなる上条だったのだが。

自分の部屋の階に到着した直後、自分の部屋の方からインデックスが慌てた様子でこちらへ走ってきたのを見て、上条は一瞬恐慌状態になった。

「い、インデックス!？」

今頃腹を空かして部屋の中で力尽きているのではと心配されていた張本人が何故あんなに元気なのか、という疑問も一瞬湧いたが今はそれどころではない。

多分あちらの方が先に上条を見つけたのだろう。上条の方は突然のことで足が完全に止まってしまったが、インデックスは構わずこちらに走り寄ってくる。

そして、インデックスは上条と対面するなり、いきなり大声で怒

鳴った。

「とうま！！これは一体どういうこと！？」

インデックスに状況を説明されても、最初は何のことだかさっぱり分からなかった。

自分の部屋に上がって、その先に先程突然走り去っていったはずのラビと出会うまでは。

「あ、おかえり〜当麻。遅かったねえ」

まるでここは自分の住居だと言わんばかりのくつろぎようだった。先程まで着ていた黒いジャンパーは部屋の隅に無造作に置いてあり、更にその上に上条家の飼い猫であるスフィンクスが自分の寢床だともいうように伏せて居座っていた。現在、ラビは緑色の男性用のチャイナ服に短パンという変わった組み合わせの服装をしている。そして、その胸の膨らみが少し小さいのを確認して、先程ラビの胸のサイズをその手で確認してしまった上条はサラシでも巻いているのか？ という疑惑を持ってしまう。

「とうま、この子は誰？ どうしてここにいるの？ 何でとうまの事を名前で呼んでるの？」

インデックスはラビを睨みながら、矢継ぎ早に質問してくる。良く分からないが、インデックスはラビの事を敵として認識しているようだった。美琴以外の人間とは基本的に友好的なインデックスにしては珍しいと思う。

いや、今は別にそんなことどうだっていい。もっと驚くべきことは他にある。

「な、何でお前がここにいるんだ！？ っていうか、どうしてお前が俺の住所を知ってるんだよ！？」

自分でも当然の反応だと思う。しかし当のラビはというと、その質問自体がおかしいとでもいうような態度で言う。

「だって、守ってくれるんでしょ？」

「いや、まあ、そりゃさつきはそう言ったけどよ。今お前がここに
いる理由にはなんねーだろ?」

すると、ラビはニヤリと笑いながら、

「あはは、良いのかなそんな態度で。実はね、道端でこういうものを
拾っていたんだけど」

そう言つて、ラビは部屋の隅にあつた複数の大きな買い物袋を指
差しながら、カードのようなものを上条へと投げ渡す。

「買い物の際に使つたからだとは思つけど、買い物袋の中に会員カ
ードを入れたままにしとくのは危ないよ。しかもその会員カード、
住所と氏名まで書いてあるから、もし拾つたのがボクじゃなかつた
ら大変なことになつてたと思つよ」

いや、既に無許可で侵入されてる時点で大変なことだろ、と言つ
てやりたかつたが、その言葉を敢えて飲み込んでおく上条。今の上
条は、そんなことで目くじらを立てている場合ではなかつた。

なぜならば、

「か、神様ラビ様仏様あ!! いや本当にありがとうラビ! お前
が居なかつたら、俺たちは今後一週間飯抜きが決定してしまうところ
でした!」

失われたと思つていた買い物袋が手元に戻つてきた事の感動によ
り、上条は買い物袋に頼ずりしながら感涙にむせんでいたからだ。

「あはは、何だか大げさだなあ。まあいいや、その代わりと言つち
やあ何だけど、一つお願いがあるんだ。聞いてくれるかな?」

いいですとも! と上条はラビの言葉に飛びつくように答えた。

「ああ、良かった。もし断られてたらどうしようかと思つちやつた
よ。実はね。ボクもここに住まわせてほしいんだ。良いよね?」

「.....え?」

先程まで天にも昇るほどのハイテンションだった上条は、ラビの
その一言で完全に硬直した。

「え? と、とうま、どういうこと!? 私が納得できるように説
明してほしいかも!」

当然といえば当然だが、現同居人であるインデックスが驚いたように質問してくる。

「あはは、何だかつれないなあ。これからここで一緒に住むことになったのに」

「まだとうまはそんなこと一言も言っていない！！　だよな、とうま？」

ラビの言動に喧嘩腰で噛み付くインデックス。そして、その問いを急に振られた上条。

これを一から十まで全て説明するのには、骨が砕けるくらいの覚悟が必要なかもしれない。

しかし、まずその前にラビをどうするのかを決めておかなければならないだろう。

うーん、と上条は苦悩する。この状況、本来ならラビにはお引取りねがうのが筋と言うもの。大体ここは男子の独身寮で、ただでさえ女人禁制の空間にインデックスがいて苦労している状況なのだ。

しかし、彼女には今後一週間分の命綱を守ってくれたという大恩があるため、彼女の願いを無碍にするわけにもいかない。なので、一応聞いてみた。

「なあ、同居する以外の願いはないのか？」

「ないね。あと、この条件を譲る気は全くないよ」

間髪入れずに即答+念押しされた。

どうあってもラビを同居させるしかないのか。更に、金銭の問題や男女間の問題を突きつけてみたものの、「ボクって学園都市から毎月結構貰えるから逆に潤うと思うよ。あと男女の問題についてはボクは当麻の事好きだから、大丈夫……、ははは」と顔を赤くしながら爆弾発言まで頂いてしまった。しかも、その後上条を見るインデックスの視線に殺気が混じり始めたのを背中を感じ、どうしたものと頭を抱える上条。

渋る上条の様子を見て不安になってきたのか、ラビは突然上条の手を握ってきた。

第一章（後書き）

基本的に、自分の小説は原作ネタバレ注意です。気を付けてください。

この一章の内容自体は数年前くらいに書いたもので、当時は19巻が出た直後くらいでした。なので現在は外部組織の力を借りて上条が帰ってきたことなどが判明していますが、そこは明記していません。pixivの方ではそのままなので、2章以降は新訳の内容を一部含みます。

ここでは以上ですわ

また、本格的なあとがきはこちらには書きません。

今回は自分の小説にお目通しいただきありがとうございます。

原作さまには遠く及ばない内容しか書けない自分ですが、宜しければ今後もこの不肖FAIVAをよろしく願います。

では、またどこかでお会いできることを願って。

・・・またねw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1522v/>

とある魔術の禁書目録

アナザーデイ・エンカウント

2011年8月16日03時22分発行